新編國文讀本 二の巻下

375.9
Fu10
資料室

30334
教科書文庫
3
810
41-1896
2000302339

資料室

明治廿九年九月廿八日
文部省檢定濟

文學士藤井乙男編

新編國文讀本

二之卷下

積善館發行

廣島大學圖書之印
廣島大學
教
22330
圖書

新編國文讀本二の卷下

目次

第一　手の善惡　齋藤彦麿
第二　繪畫　中山三柳
第三　物の上手　富士谷御杖
第四　詩のよみやう　本居宣長
第五　書籍の貸借　本居宣長
第六　道の秘事　本居宣長
第七　一飯の恩　藤原兼良
第八　雪の景色　林述齋
第九　新綠花よまざる　林述齋

第十　瓢藏銘　櫻井梅室
第十一　奥州紀行　松尾芭蕉
第十二　蟲の評　横井也有
第十三　連歌俳諧の事　太宰春臺
第十四　風雅　本居宣長
第十五　戰中の連歌　橘成季
第十六　野見宿禰　中山忠親
第十七　坂上田村麿　中山忠親
第十八　源烈公朝廷を尊び給ふ一　藤田東湖
第十九　源烈公朝廷を尊び

第二十　給ふ二　藤田東湖
第二十一　廉直　作者未詳
第二十二　樂のねせしむ　海賊を感　作者未詳
第二十三　清少納言の事　作者未詳
第二十四　伊賀局　松翁
第二十五　神功皇后新羅を征し給ふ　中山忠親
第二十六　塞翁が馬　作者未詳
第二十七　日野阿新一　小島法師
第二十七　日野阿新二　小島法師

第二十八　皇室中興の事　北畠親房
第二十九　天皇　作者三名
第三十　御製
第三十一　楠正成の參内　小島法師
第三十二　小山田高家の忠死　小島法師
第三十三　藤房卿鷹、巢山よて讀經の事　松翁
第三十四　小野、篁、廣才の事　源、隆國
第三十五　百濟川成と飛驒、工と技を爭ふ　源、隆國

第三十六　殿と樣と　石原正明
第三十七　大塔、宮熊野落一　小島法師
第三十八　大塔、宮熊野落二　小島法師
第三十九　保元の軍評定に爲朝が申條　作者未詳
第四十　待賢門の戰　作者不知
第四十一　忠致尾州に逃れ下る事　作者不知
第四十二　武將の吟詠　作者三名
第四十三　經家悍馬を御す　橘、成季
第四十四　義家の智能　橘、成孝

第四十五　猿、鳥を使ふ　橘、成季
第四十六　狗、蛇を殺す　源、隆國
第四十七　高倉、院の御仁德　作者不詳
一
第四十八　高倉、院の御仁德
二　作者不詳
第四十九　勸修寺經廣卿　富士谷層城
第五十　漢藉よみの言葉　本居宣長

新編國文讀本二の卷下目次終

薩摩大學圖書之印

四段活用動詞

新編國文讀本二の卷下

第一　手の善惡

齋藤彦麿

おのれ、手がく事拙ければ、よき手して書きたるをば、美しく思ふこと、常に絶えず。文字も、千歲の後にも傳へて、定めに讀みぶるべく、千里隔ちぬる遠き境の人も、まのあたり逢ふ心地して、ことの意、通るべき爲よしあれば、いかよ手のよろむにも、文字の畫を略き過ごして、本體を失ひて、曲筆にみだれ書きたるは、打ち見る所は、一きは、勝れて花やかに、なべての人の及ぶべき際なら

眞淵　加茂眞淵ハ遠江の人、縣居と號す。歌は萬葉を師とし、文章は古體を用ひたり。古學の世に行はるゝやうになりしは。此の人の力多し。明和六年、七十三にて歿せり。

貞丈　伊勢貞丈、安齋と號し、有名の有職家なり。天明四年歿せり。年七十。

ず思はるれど、さて讀まむには、よみ得がたく、とさまかうさま、考へても知られず。人にも見せて、互に、傾きいぶかりつゝ、遂に讀み果てずして止みぬるたぐひ、我が師の師たる眞淵翁の筆よりも、さるたぐひありしなり。

我が師二人も、手書の師ならねば、手は拙けれど、眞丈は、草書、平假名といへども、略文字はかゝれず。そは、手の鈍き故なるべけれど、手書の師にあらず。宣長も手の師よはあらねど、筆體正しく、かりそめよも、讀みがたき字はあゝれず。書體みたれたる事なし。これをたとへていはゞ、手のよき人たちの畫を略き、體を亂し、本體を失ひて、亂れあきたるは、言語朦朧として、唇舌みたれて、物いふ如く、人の耳よも、聞きわき難かるべし。字體正しく、さやかに書きて、誰が目にもよく讀まるゝは、音勢さわやかに、五十音正しく、三聲清濁、あきらかよして、よく聞とゆるが如し。とゝを以て、手のよしあしも、次として、言を誤らず、假名をたがへず、天爾乎波を亂さず、言の意、よく通るべくすべきなり。手はよしとても、其のかく事の拙ければ、とよなう心劣せらるゝ物になむありける。

四段連體言

第二　繪畫

中山三柳

三柳、花陽軒と號す。土佐の人なるが京師に來りて、醫を業とし、儒學を三宅道乙に學べり。曾、後水尾天皇の御脈を診して功あり。後、醍醐の里に隱遁し、感慨を吟詠に洩せり。天皇歌を賜ひて、これを賞す、時人皆榮なりとせりき。

引きまはしたる屏風、軸つけたる物などは、よからずとも、畫にしくはなし。畫はまた、感慨のふかき、心の慰むものはあらじ。野山ひろげに書きなしたる、水草の清げなるあたりのずてをぶね、人なうしてや横ふらむと、興に入るあまり、舟人を尋ねて、かへり去らむと思ふも、畫にてこそあれ。瀟湘の、夜の雨を聞く心地し、洞庭の、秋の月をわながら見るもをかし。なまじひに、物しり顔なる人

大雅堂

池野大雅、名は無名、通稱秋平、別に霞樵と號せり。書畫をよくし、風流豪放、貧苦を事とせず。安永五年、五十四歳にて歿せり。

のこれは、その寺の貴僧の手跡、それは、かの里の連歌師の發句などいひて、よからぬ文書などをさちらし、掛け置くこそ、其の心もわしはかられて、さばかりの人よと見ゆれ。手跡ならば、本朝の能筆、並びに、歌仙、唐の詩人、文人、羲之、子昂の類ひこそ〻しけれ。飛鳥川

第三　ものゝ上手

富士谷御杖

大雅堂といひし人、近頃、書畫をもて鳴きり。若ろ望し時、三絃を好めるあまり、其の頃の妙手ふりし、安永撿校といふ警者の近隣に、ものゝ上手にて、日々に、人々にをしふる找聞きて、心をやられ

四段終止言

四段連用言

きゝある時、安永ゞ家に至りて、ゐく殊更に近隣よ
ト居ゑさるよしを告げて、一曲をのゞむ。安永、そ
の志のねもごろゑるを感ゞて、やゞて、側にあ
し三絃をさゞりとりて、ひきて聞せきゝゑろるに、
其の三絃、裏皮やぶきたりけきばいとふくつけ
けきゞ、れのき一期のれもひ出よ、皮全きにて、今
一曲をと乞ひけるに、安永、心よからぬれもゝゑ
して、そゑゑ、なにを業とし給ふゞと問ふ。大雅答
へて、繪をかき侍るといふ。安永のいへらく、さゑ、
そこい、繪いいゑ拙ろるべしといふよ、大雅、れも
へらく、一道よ達しぬきば、よろづのいたりも深

言四段与絃

きならひゑきゞ、とれい瞽者ゑる找、いろでろ、繪
事いゑるべきと、ゑまかたゑら痛々きゞ、いゑゑ
きば、れのれの繪の拙きを知り給ふゞといふに、
安永笑ひて、今、裏皮やぶきたる三絃にてひきた
るを、あろずゑばす、其のきゝざまにて、繪の拙さ
いゑるきゑりずべて、三絃い、右に撥をもてれど、
右手にてひく事、いふゑ更ゑきゞ、左手に精神ゑ
くてい、妙處よい至るべろらず。今、ゞゞ左手の精
神、そこの耳に入らぬをもて推ゑよ、繪事もまさ、
筆い右手にもちてかくもいふもさらなきゞ、恐
くも、左手に精神あらゞと思ふゞ故ゑりといひ

き。

大雅いといたく感服懺悔して、深く恩を謝して、かへりて後、繪にふろく心やいたりたりけむ。遂に、世に鳴るばろり、一家をれとさきたりき。ときひとへに、安永撿校ゞ恩ゝて、やゞて、ゞゞ繪の師ふりと、常に、自いまきれと、大雅にうるはしろゞし本間ふにゞし、どれを語られき。むかふきゞざといぺぞも、いたりをきめたるきはゝ、人の耳目の及ばぬ處にすら、精神ハみちたり。此の物ゞとり、專、ゞゞ御國ぶりの要を得とり。ものいもむにも、打ちふるまはむにも、文ゐゝむにも、歌よまむにも、たゞ耳目のれよぶをのゝ、かぎりと心得ふば、かの安永撿校ゝわらハきむかし。北邊隨筆

四段已然言

第四　詩の讀みやう

本居宣長

童蒙抄に、ある人、北野に詣でゝ、東行西行雲渺々、二月三月日遲々といふ詩を詠ゝけるに、すこしまどろみたる夢に、とざまに行き、かうざまに行きて、雲はるばる、きさらぎ、やよひ、日うらゝとこそ詠ずれと仰せられけり、云々とありぬ。むかしは、詩をも、うるはしくは、かくざまにこそ、讀みあげけめ。詠むるはさらなり。いにしへは、すべて、からぶみを讀むにも、よまるゝ限は、御國ことばに

讀めるは、字音は、聞きにくかりしが故なり。然るを、今はかへざまになりて、なべての詞も、御國とばよりは、字音なるを、うるはしき事にし、ふみよむにも、讀まるゝ限は、字音によむを、よきこととするは、からぶみ學びのためには、字音によむかた、よろしき故も、あきばかし。玉かつま

第五　書籍の貸借

本居宣長

珍しき書を得たらむには、親しきも疎きも、同じ心ざしならむ人には、かたみに、やすく借して、見せもし、寫させもして、世にひろくせまほしき業なるを、人には見せず、わのれ、獨、見て誇らむとするは、いとく、心きたなく、物學ぶ人のあるまじきことなり。但、得難きふみを、遠くたよりあしき國などへ、貸しやりたるに、あるは、道の程にてもふれうせ、あるは、其の人、俄になくなりなどもして、遂にその書、かへらずなる事あるは、いと心うきわざなり。されば、遠き境より、借りたらむ書は、道の程の事をも能くこたゝめ、又、人の命は、俄なる事も、量り難きものにしあれば、なからむ後にもむふらさず、たしかに、返すべく掟て置くべきわざなり。すべて、人の書を借りたらむには、速に見て返すべきわざなるを、久しく、止めおくは心

なしさるは、書のみにもあらず。人にかりたる物は、何もく、同ど事なる中に、いかなればか。書は、殊に用なくなりて後も、なはざりにうちすてゐきて、久しく返さぬ人の、世に多きものぞかし。たまかつま

第六　道の秘事

本居宣長

いづれの道にも、その大事とて、世にひろく漏さず、ひめかくす事多し。誠に其の道大事ならば、殊に世に廣くとそせまほしけれ。あまりに重くして、たやすく傳へざれば、狹くなりて絶えやすきわざぞかし。そも濫に廣くしぬれば、其の道かろがろしくなることといふなるも、一わたりは、とわりある樣なれども、たとひ、輕々しくなるかたはありとても、なほ世にひろまるとそはよけれ。廣ければ、おのづから重きかたはあるぞかし。いかに重々しければとても、狹くかすかならむは、よきことにあらず。まして絶えもせむには、何のいふかひかあらむ。されど近き世に、道々に、秘傳口訣などいふなるすぢ、おほくは道を重くすてふは、たゞ名のみにて、誠は人に知らさずて、己れひとりの物にして、世にはとらむとする、私のきたなき心、又それよりもまさりて、きたなき心

なるゞ、おほかる。さる類も、もろ〳〵のはかなき伎藝の道などは、とてもかくてもありぬべけれど、うるはしくはかゞ〳〵しき道には、さる事有るべくもあらず。玉勝間

第七　一飯の恩

藤原兼良

文明後土御門天皇、將軍足利義尙。

兼良は關白經嗣の子にて、和漢、儒佛の學に通じ、博識强記にて著述いと多く、歌林良材、花鳥餘情、公事根源等皆有益の書なり。自謂ふ、余は菅相公に勝れること三あり、攝家に生れし事、太政大臣に昇りし事、延喜以後の事を知れること、これなりと。後、關白となり、文明十二年、八十歳にて薨せられたり。

人の恩を知らず、不義に過分なる事の、世の末には、多くあるにや。臣として、君を傾けなどし、子として、父をあやまつ程の事は、世の常になきことと

なれば、申すに及ばず。上を輕くし、おのれを、さきとする類のみ、多くあるにや。大かた、恩を思はざるは、鳥獸に、劣れりとゞ申す。心なきたぐひ、猶恩を報ずる事多し。人として、いかでか、思ひしらざる事あるべき。昔、韓信といひし人、わかくては、あさましく貧しかりしかば、釣りなどをも、去ける にや。浦人の家に行きたりけるに、飢に臨み給へるにやとて、さまゝ、もてなしたりけるに、此の韓信、後に御門に召し出されて、國の管領などになりて、此の浦人の家に行きて、色々の寶物をもたせて、昔の心ざしを、報せむと申しけるに、浦人

上二段活用

申しけるは、只、貧しきを、憐れみ奉りしにこそあれ。かならず、恩を報せられ侍るべしとは、さらさら、思はずとて、寶物をも、みな返して、とらざりけり。

韓信の、一度のもてなしを報いけるもやさしく、又、浦人の志も、誠に、ありがたきためしにぞ、申し傳へたる。一飯も、かならず、むくゆといふことは、これより申すなりとこそ。此の比のやうは、我が身のかなしき折は、手ずり足ずりして、其の事やみぬれば、やがて、あくる日より、さる事のありしとだに、思ひいたらぬこと、いと心うきわざ也。も

下二段活用

とより、心もあり、世になれたる人などは、さることあるまゝけれど、人にもまゝらぬやうなるものゝ、俄に、いみゝくなりぬれば、やがて、心驕りせらるゝ事にてあるにや。小夜のねざめ

下二段活用

第八　雪の景色

林　述齋

雪も、眞白につもりたる時を、めづるのみかは。木竹の緑見ゆる程とそよけれ。あまり深く積りたる時は、銀世界となるまでにて、部致なきものゝかし。昔より春雨の靜趣をめでこしなれど、長閑なる頃なれば、雨なくとも靜なる日多し。年やゝ暮れなむとして、世の事去げく日を送る中に、一

下二段活用

日風もなく、聊、六〻の花散るよと見るに、やがて降りしきれば、すべて何となく物靜になりて、聞き馴れし雀、鴉、鶏の聲までも、なつかしき樣に思はれ、世の中の騷しさも打ち忘れて、いつ迄も眺めにあかぬ者なり。又、宵の間に吹き荒れし風收まりて、常よりげに靜けき夜半に、いまたねもやらず、寒さは中々もるびたる樣に覺ゆるに、軒にそそぐ音の怪しければ、窓ゐし明けて見るに、空は暗くて見わくべくもあらねど、燈かゝげてよく見れば、いつしか木竹の枝先、白くふりかゝりたるは、いと興あるものにあなる。

述齋偶筆

第九　新綠花にまさる　林　述齋

花時より綠陰をよしとすること、六朝の詩に始まり、宋、明にも見ゆ。我が先輩の歌仙の、新綠勝花といふ題を設げしは、暗合して、よくも思ひよりけり。花ちりしのち、日にぞぴて青葉深くなりゆき、牡丹、藤、薔薇、躑躅咲きつゞきて、杜若にうつる比はひは、げに一とせの中に、好時節とやいふべき。花は風雨のみかは。また咲かぬ間は、日毎にまち、盛になれば、心あわたゞしく、その中に、はや散るをかこつやうになりぬめり。新綠のはゞは、日もますく、ながく、心もいよゝ長閑にて、あとさ

花信二十四番　歳時記に、自初春至初夏、有二十四番、風始於梅花、終於楝花、謂之花信風。

きを考ふる心もなく、日數あまたに、景物をもてあそぶべし。空打ち曇り、雨もよひのけしきなるは、おもしろからぬものにて、人もかしらおもく、けぶたかる事多し。然るに、卯月の頃は、晴れたる日より、卯花の、宵ごとにいちゞるしく、雨もやゝ降りくるかと、うちあふぎ見れば、折に樗の花咲き出したるなど、時去りがほにてをかし。楝は花信二十四番の終にて緑陰の頃、薄雲の色の、艶にはあらぬものから、最、風情あり、木末たかく咲きいで、花なき時なれば、目立ちて見ゆ、かつ盛久しくてよし。水木の花も、田家めきたれど、新緑の中に、純白を簇らす。風致また捨てがたし。大てまり、ますゝよし。多雨の夏は、荷花多く出でず。はた盛も短し。早年は、花の出づること多く、盛の間長し。一年此の花のさかり、凡、二月ばかりなりしとありき。述齋偶筆

嘉永孝明天皇、將軍家定。

第十　瓢藏銘　櫻井梅室

梅室、名は宣弘、別に寒松庵雪雄と號す、加賀金澤の人、闌更の門に入りて、俳諧をよくす。後、京師に出でゝ、東洞院に住み、門人大に集る。嘉永五年、八十四歳にて歿しぬ。著す所、梅室句集あり。

いとまある時も、遑なき時も、心よ浮ぶ事あるよ。まかせて、紙のきれ、反故の端に、何くれと書きつけつゝ、そを窓のあたり、燈の下に引き散らして、

其の中に寢もし起もするは、俳諧好めるものゝ常なりけり。洒掃の童僕、朝な夕なに、之をつぶやけども、耳にたにかけず。偶、一ひらをも失ふことあれば、金玉をも失へる如くに罵る。或人之を罪深きことに思ひて、こゝに瓢藏てふ物を坐右にかしづけ、つゞ〳〵之を納めて、僮僕の煩をたすくとなむ。即、余に乞うて一言をかいつけよといふ。よつて銘して曰く。

汝、口大にして、泄し易く、臀輕うして、覆り易し、愼むべし〳〵。若、之を誤たむ、目鼻を書いて乞兒に與へむ。俳諧文集

古今集に、みちのくは、いづくはあれど、塩竈の、浦こぐ船の、綱手かなしも。

第十一　奥州紀行　松尾芭蕉

それより野田の玉川、冲の石を尋ぬ。末の松山はて寺を造りて、末松山といふ。松のあひ〳〵皆墓原よて、羽をかはし、枝をつらぬる契の末も、終はかくの如しと悲しさもまさりて、鹽竈の浦に入相の鐘をきく。五月雨の空、聊はれて、夕月夜幽に籬が島も程近し。蜑の小舟漕ぎつれて、肴わかつ聲々に、つなで悲しもとよみけむ心も知られて、いとゞあはれなり。その夜、目盲法師の琵琶をならして、奥淨瑠璃と云ふものを語る。平家よりもあらず、舞よりもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕

文治後鳥羽帝の時の年號。

近うかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝よ覺えらる。

早朝、鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階、九仞に重なり、朝日あけの玉をかゞやかす。かゝる道の果、塵土の境、さて神靈あらたにましますこそ、我が國の風俗なれと、いとたふとし。神前に古き寶燈あり、金の戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の俤、今、目の前に浮びて、そゞろに珍し。渠も勇義忠孝の士なり、佳名今に至りて慕はずといふ事なし。誠に人よく道を勤め、義を守るべし、名も亦これに隨ふといへり。日既に午に近し、船をかりて、松島に渡る。その間二里餘、雄島の磯よつく。

抑、とふりたれど、松島は扶桑第一の好風よして、凡、洞庭、西湖を耻かしむ。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡くして、故つものは天を指し、臥すものハ波に匍匐し、あるは二重にかたより、三重に疊みて、左よわかれ、右よ列る。負ふあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃に、枝葉汐風に吹かれて、屈曲おのづから矯めたるが如し。ちはやふる神のむか

し、大山ずみのなせる業よや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡くさむ。

雄島が磯は地つゞきよて、海よいでたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などありぱた、松の木陰に世を厭ふ人も、稀々見えて、落穗、松笠などを打ちけぶりたる、草の庵閑よ住みなし、いかなる人とハ知られずながら、まづなつかしく立ちよる程に、月海ようつりて、晝のながめ又あらたまる。江上に歸りて宿を求め、窓をひらきて、風雲の中に旅寐することそ、怪しきまで、妙なる心地はせらるれ。中略

萬葉集十八に、すめらぎの、御世さかえむと、東なる、みちのく山に、黃金花咲く。

十一日、瑞岩寺に詣づ、當寺三十二世の昔、眞壁平四郎出家して入唐し、歸朝の後開山す。其の後に雲居禪師の德化よりて、七堂甍改まりて、金壁莊嚴、光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。十二日、平泉と心ざし、あねもの松、緒絕の橋など聞き傳へて、人跡稀に雉兎蒭蕘の往きかふ道、そこともとかず、終に路踏みたがへて、石巻といふ港に出づ。黃金花咲くとよみたる金花山、海上に見渡し、數百の廻船、入江につどひ、人家地を爭ひて、竈の煙立ちつゞけり。思ひかけずかゝる所よも來ぬる哉と、宿からむとすれど、更に宿か

す人なし。漸、まどしき小家よ、一夜をあかして、明くれば又知らぬ道まよひゆく。神のわたり、尾ぶちの牧、まのゝ萱原などよそめよ見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて戸伊摩と云ふ所に一宿して、平泉よ到る、その間、二十餘里程とおぼゆ。三代の榮耀、一睡の中よして、大門の跡は一里となたよあり。秀衡が跡は田野よなりて、金鷄山のみ形を殘す。まづ高館よ登れば、北上川、南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下よて、大河に落ち入る。康衡が舊跡は衣〃關を隔てゝ、南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて、此の城よ籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春よして草青みたりと、笠打ちしきて、時の移るまで涙をおとしぬ。

杜甫の詩に、國破山河在、城春艸木深、感時花濺涙、恨別鳥驚心。

夏草や兵どもが夢の跡。　奥の細道

第十二　蟲の評　　横井也有

也有は尾張の重臣、孫左衛門と稱し、性淳朴にして文雅を好み、又武事に通ず。俳句詩歌皆よくせざるゝなけれど、殊にその俳文は縱横自在にして、備に周旋の妙を極めたり。天明三年、八十一歳にて歿しぬ、著書に鶉衣、小皮籠等あり。

蝶の花よ飛びかひたる、やさしきものゝ限なるべし。それも啼く音の愛なければ、籠よくるしむ身ならぬとそ猶めでたけれ。さてとそ莊周が夢

もとの物よは託しけめ。只とんぼうのみとそ、かれよもやゝ並ぶらめど、糸よ繋がれ、糊にさゝれて、童のもてあそびとなるたよ苦しきを、あはうの鼻毛につながるゝとは、いと口惜しき諺かな。美人の眉よたとへたる、蛾といふ蟲もあるものを。中略

古今集の序に、花になく鶯、水に住む蛙の聲をきけば、生としいけるもの、いづれか歌をよまざりける、云々。

芭蕉翁の句に、古池や蛙とび込む水の音。

蛙は古今の序よかゝれてより、歌よみの部に思はれたるとそ幸なれ。朧月夜の風靜まりて、遠く聞ゆるはよし。古池よ飛んで、翁の目さましたれば、この物の事、さらよも謗りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。

芭蕉の句に、やがて死ぬ氣色は見えず蟬の聲。

やゝ日ざかりに啼きさかる比ハ、人の汗ばむる心地す。されば初蝶とも、初蛙ともいふ事をきかず、この物ばかり、初蟬といもるゝとこそ、大きなる手柄なれ。やがて死ぬけしきは見えずとこの物の上は、翁の一句よつきたりと云ふべし。

貧の學者車胤が故事をいへるなり。

螢は類ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草よすたく五月の闇は、たゞこの物の爲よやとまでゑ覺ゆる。去かるに、貧の學者にとられて、油火の代よせられたるは、この物の本意よはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ととの外の不自由なり、俳諧よはその眞似す

べからず。鶉衣

第十三　連歌俳諧の事　太宰春臺

連歌といふことと、中古より始まりて、末の世よ盛なり。その本は、三十一文字の歌を二つに分けて、二人してとなふるなり。たとへば、近衛院の御前よて宇治左大臣、

郭公名をも雲ゐにあぐるかな

とのたまひしに、頼政、

弓はり月のいるにまかせて

と申されしなど、これ連歌なり。此のことと上代よりありしかども、連歌とは云はず。後の世よ至り

いる射の意にては上一段活用。入の意なれば、四段活用。

て、上の句、下の句をいくらも連ねて、長く云ひのぶる事よなりて、連歌といふ名出で來れり。中華に聯句といふことありて、五言の句を一人二句づつ作り、人數多よて數十百句も連ぬるなり。この國の連歌は、彼の聯句よ倣へる物と見ゆ。連歌は和歌の類なる故に、歌人もこれを嫌はず、後よ及びて連歌師といふ者出できて、さまざまの式法を立てゝ、遂に世の翫となれり。近き世に及びて、又別に俳諧といふことと出できて、賤しきたれ事をつゞりて、連歌の如く長く連ねて翫とするは、俳諧の連歌なり。その初、連歌

貞徳
松永貞徳、京師の人、長頭丸、又逍遙軒と號し、有名の連歌師なり。承應二年、八十三歳にて歿せり。

宗因
西山宗因は檀林派の俳諧師にて、はじめ大坂に住し、後、東都に來り、天和二年、七十八にてみまかれり。

師の輩、連歌の句に、たゞむれ事の連歌よは云ひ難き程のことも、一句二句つらねて笑ひ興ずたるを、その後、俳諧師といふ者出て來て、これを專にすることになれり。貞徳、宗因、芭蕉翁など云ふ者これなり。されど貞徳等が時の俳諧は、戯れごとをかしく言ひなして、うち聞く者殘らず、とらへず笑ひ興ずるのみなり、芭蕉翁までは猶その體なりき。

それより下りては、ひたすら、をかしき事をいむとて、下部の者までも、打ち聞きて悦ぶやうなる事をいふ故に、極めて賤しき事を嫌はず親子

兄弟の中よて云ひ難く、聞きよくきことをも云ひ出す。俳諧の中よても、至りて下れる品なり。然れども五十年の前は、たゞ歌仙とて三十六句を連ね、或は五十韻、百韻とて、連歌の如く列ねて、宗匠の點を乞ひて、優劣を爭ひあへるのみなりしに、元祿の初の頃より、前句附といふ事起れり。その法、宗匠より下の句を一句出たして、多くの人に、上の句を附けさせて、點に第一第二の品を命ゞて、甲乙の次第よ從ひて賞を行ふ。その賞は或は布帛、或ハ器物など、そとむくの値なる物を出たす。布帛器物に望なき者は、その値なる金銀

をとる。この賞をえむとて、貴賤となく我もく、と句を附けて、日々に點錢を費す。これ則、博奕の類なり。この事、盛に行はれて、世の俗人皆これを好む程に、下の句に上の句をつくるも、猶むづかしとて、宗匠より上の句、初の五文字を出たして、次の七文字、五文字を諸人につけさする事になれり。これを冠附とも、笠附ともいふ。

かくいやしき業になりぬれば、下部のわらはげすまでも、俳諧と云ふことと知りて、笠附して褒美とらむとするほどに、詞いよ〳〵いやしくなれり。獨語

第十四　風雅

本居宣長

すべて人は、雅（みやび）の趣を知らではあるべからず。これを知らざるは、物のあはれを去らず、心なき人なり。かくて其のみやびの趣きを去ることは、歌をよみ、物語書などをよく見るにあり。然して古人のみやびたる情を去り、凡て古のみやびたる世の有樣を能く知るは、これ古の道を知るべき階梯なり。然るに、世間の物學びする人々のやうを見わたすに、むねと道を學ぶ輩は、上にいへる如くにて、多くはたゞ漢流の議論理窟にのみかかづらひて、歌などよむをば、たゞあだごとのや

うに思ひすてゝ、歌集などは、ひらきて見むものともせず。古人の雅情を夢にも忘らざるが故に、その主とするところの、古の道をも知ることあたはず。かくの如くにては、名のみ神道にて、たゞ外國の意のみなれば、實には道を學ぶといふものにはあらず。さて又歌をよみ、文を作りて、古を忘たひ好む輩は、たゞ風流のすぢにのみまつはれて、道の事をばうちすてゝ、更に心にかくることとなければ、よろづにいにしへを慕ひて、ふるき衣服調度などをはろとび、古き書を好みよむたぐひなども、皆たゞ風流のための、玩び物にする

のみなり。そもく人としては、いかなる者も人の道を忘らでは有るべからず。殊に何のすぢにもせよ、學問をもして、書をもよむほどの者の、道に心をよすることとなく、神の惠の、たふときわけなどをも忘らず、なほざりに思ひて、過すべきことにはあらず。古を慕ひたふとぶとならば、必ずづ、その本たる道をとそ、第一に深く心がけて、明らめ忘るべきわざなるに、これをさしおきて、末にのみかゝづらふは、實にいにしへを好むといふものにはあらず。さては歌をよむも、まことにあた事にゞ有りける。宣長がをしへにしたがひ

て、物まなびせむともがらは、これらの心を、よく思ひわきまへて、あなかしこ、道をなほざりに思ひ過ぐす事なかれ。宇比山踏

×第十五　戰中の連歌

橘ノ成季

橘ノ成季はその傳詳ならず。著聞集の序に、建長六年とあれば、後深草天皇の御代の人なり。著聞集二十卷、神祇より魚蟲禽獸まで、類を分ちさまゞの物語をしるせり。文辭暢達にして、晦澁古僻の弊少し。

伊豫ノ守源ノ頼義朝臣、貞任、宗任等を攻むるあひだ、みちのくに十二年の春秋をおくりけり。鎭守府をたちて、秋田ノ城に移りけるに、雪降りて軍のをのこどもの鎧、白妙になりにけり。衣河の舘岸高く、川ありければ、楯をいたゞきて兜にかさね、筏をくみて攻め戰ふに、貞任ら堪へずして、つひに城のうしろよりのがれ落ちける。一男八幡太郎義家、衣河に逐ひたてて、攻めふせて、きたなくも、うしろを見するものかな。ゑばし引きかへせ、物いはむといはれたりければ、貞任見かへりたりけるに、

衣のたてはほころびにけり

といへりけり。貞任くつばみをやすらへ、ゑとろをふりむけて、

年をへし絲のみだれのくるしさに

と付けたりけり。その時、義家、はげたる矢をさし

はづして、歸りにけり。さばかりの戰の中に、やさしかりける事かな。古今著聞集

奈行四段變格

×第十六　野見宿禰　中山忠親

忠親は權中納言忠宗の子にして、藏人頭より累進して、內大臣となり、建久六年に薨せられたり。その著水鏡は、神武天皇より、仁明天皇嘉祥三年までの歷史を略叙せるものにて、大鏡の前を補ひたるものなり。

垂仁天皇二十八年と申しゝに、帝の御弟の親王、失せ給ひにき。其の程の世の習にて、近く仕うまつる人々を、生きながら御墓にとめられにけり。此の人々久しく死なずして、朝夕に泣き悲しむを、帝きこしめして、仰せらるゝ樣、生きたる人をもちて、死ぬるに殉へむことは、古より傳はれる事なれども、われ此の事を見聞くに、悲しきこと限なし。今よりは、此の事永く止むべしとのたまひぬ。其の後、野見宿禰と申す人、土にて人がた毛物の像などを造りてなむ、人の代りに塚にとめ待りし。これはやけとれを喜びて、土師といふ姓を賜はせしなり。水鏡

×第十七　坂上田村麿　中山忠親

嵯峨天皇弘仁二年正月二十三日に、豐樂院に出で給ひて、弓あそばして、親王已下射させ奉らせ給ひしに、帝の御弟の葛井親王は、いまだ幼くおはして、弓射たまふうちにも、覺しよらざりしを、

帝戯れて、親王幼くとも、弓矢を執り給ふべき人なり。射給へとのたまはせしに、親王立ち走りて射給ひしに、二の矢、皆、的にあたりにき。生年十二にぞ成り給ひし。母方の祖父にて、田村麿大納言ろの座に侍りて、驚き騒ぎ、喜びて得鎮めあへずして、座を立ちて、うまどの親王をかき抱き奉りて、舞ひかなでて、帝に申していはく、田村麿、むかし多くの軍の將軍として、夷を討ち平げ侍りしは、唯帝の御威なり。兵の道を習ふと雖、いまだ極めざる所多し。今親王の年いとけなくして、かくおはする、田村麿更に及び奉るべからずと申し

き。今も昔も、子孫を思ふ心は、あはれに侍る事なり。さて程なく五月二十三日に、田村麿うせにき。年五十四にぞ成りし。形ありさまゆゝしかりし人なり。たけ五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、目は鷹の眼の如く、髭はとがねの絲筋をかけたるが如し。身を重くなす時は二百一斤、輕くなす折は六十四斤、心に任せて折に從ひしなり。怒れる折は眼をめぐらせば、けだし物皆倒れ、笑ふ時は形なつかしく、をさなき子もおぢ恐れず抱かれきた人とは見え侍らざりしなり。（水かゝみ）

第十八　源烈公朝廷を尊び給ふ一

良行四段變格

かけまくも畏き朝廷は、千早振る神の御代、天祖天照大御神の言依さし賜へるまに〳〵、皇孫命天降りまして、豐葦原の中つ國を治らしめし給ひしより以來、三種の神器傳へ給ひ、天日嗣いやつぎ〳〵につぎ給ひ、ひさかたの天、あらがねの地と諸共に、幾久しく榮え給ふべきためしにましましゝは、凡、神國に生れぬる人々、仰き奉りて、已れ已れが遠つ祖より初め、幾千年が間、朝廷の恩賚蒙りしことを、思はずば、有るべからず。さかは有れど、明けき日の光をも、浮雲立ち蔽へるが如

藤田東湖

應永後小松天皇、足利義滿。

く、奸賊起りて、一天の君を蔑如し奉るためし、無きにしも非ず。吳竹の世々には、樣々の禍事ありて、幾度か亂れ、應永の後に至りて、天下の亂いと極りぬるを、東照宮起らせ給ひ、萬の靑人草の水火に苦むかりなりしを、救ひ給ひしかども、朝廷を尊み奉りて、御身はいたく謙遜し給ひ、二百年あまり今日迄、四海波靜にして、吹く風、枝を鳴らさず。人々安く樂みて、世を渡りぬる事、偏に幕府の德澤なれば、今の世に生れし人、幕府を敬ひて、東照宮の恩澤に報い奉らずば有る可からず。我が義公、深く此の理を明らかにし給ひ、常に宗

室を輔けて、朝廷を尊ぶ事を宗とし給ひけるに
ゞ、大日本史を述べ、禮儀類典を纂め、又楠子の墓
に石ぶみ建て、忠臣の心を勸め給へるなど、人皆
仰き奉る所なり。我が館に天拜と云ふ式ありそ
は年々正月元日のあした、殿の前なる廣庭に敷
物設け、齋明盛服して、遙に京師の方に向ひて、遙
拜し給ふなり。又敕使を三家の館に下し賜ふ時、
我が君御時刻を移さず、御自、勅使の旅館に至り
て、其の辱き事を述ぶ。是れ皆、義公初め給ふ所に
して、代々のためしとなれり。中納言の君、深く其
の遺志を心し給ひ、幕府を敬ひ天朝を尊みて、忠

孝の義を明にせし事を、人々にも語り給ふ。常陸帶

第十九　源烈公朝廷を尊み給ふ二

藤田東湖

抑、神武天皇より、始め奉り、代々の山陵、其の地た
にさだかならず、或は深山の苔に埋れ、或は荒野
の叢にまゞりて、拜む人さへ絶えて無き事を、い
たく歎き給ひ、怪しき賤が男たに、其の先祖の墓
と有れば、草取り苔掃ひなどして、敬ひ祭る業な
るを、一天の君の山陵、かく迄に成りぬる事、明時
の耻なりと宣ひて、古事記より初め、諸々の書籍

庚子の年天保十一年にて、則光格上皇崩御の年なり。

を考へ給ひて、御みづから物に記し給へるさまを見奉りぬ。其の事幕府に申し給へる成らむと計り奉れども、幕府も其の儀に同ど給ひて、時を待ち給ふにやはた障もありて始め給はぬにや、庚子の年、先帝崩ど給ひしにも、何事やらむ書きぬ綴り給ひて、殿下にも、幕府にも、御書を越し給ふ。都にて國中の事は、有司に計り給ふ故、思召も顯れぬれども、天下の事幕府に申し給ふ類は、御みづから物し給ひて、露だに人に漏らし給はねば、其の委しき事を、知るべき樣なし。唯是れ彼れと、推し測り奉るになむありける。扨江戸にましゝ

時は、日々登營し給ひて、將軍家にまみえ給ひ、日日御守殿に參り給ひて、何くれと孝養を盡し給ひけるが、庚子の年より、水戸におはしまして、まみえ給ふ事も成し得給はねば、朝なゝ、必、禮服し給ひて、遙に江戸の方に向ひて、將軍家を拜み給ひ、又御守殿を拜み給ふ事、一日も怠らせ給はず。辛丑の夏より、將軍家くさぐ正しき政、仰せ出されしを聞き給ひて、深く悅び給ひ、江戸の邸より幕府の命令を告げ來る度ごとに、諸有司を召し、且喜び、且勵まし給ひ、又聊、幕府の政弛みぬるなど云ふ風說を聞き給へば、いたくうしろめ

たく思し召して、御心を惱まし給ふ事、國中の事を憂ひ給ふに異ならず。

かく迄忠孝の御心厚くましますを、君には幕府を憚り給はざる樣に、讒し奉る人もありなむかし。そは義公よりとのかた、朝廷を尊み給ふ御家風のみ聞えて、幕府を敬ひ給ふは、孝を東照宮に竭し給ふ所以、天朝を尊び給ふは、忠を天祖に竭し給ふ所以なり。然るに世の書讀める人さへ、此の理を明にせず、國學に泥みぬる者は、やゝもすれば、關東を輕んじ、漢學に迷へるものは朝廷を尊ばず。甚しきに至りては、代々の將軍家を指し

柴野彦助　柴野彦助は栗山と號す、幕府に仕へ昌平黌儒官たり、文化四年歿す享年七十四。文恭公　文恭公は將軍家齊の諡號。

て、王と稱し奉るものの有るに至る。是れ幕府を誣ひ奉るに等しく、大なる僻事なり。柴野彦助、畝傍山の山陵に詣でて作りし詩を、文恭公の御覽に備へしに、陪臣無位柴邦彦と書きたるを、公怪み給ひし時、白河の少將御側に在りて、朝廷に向ひ奉りては、定信等皆陪臣なり。まして彦助如き無位の者をやと申上げしかば、公悅び給ひけりとぞ。かく有りてこそ、幕府の盛德ますく天が下に弘まるべき事になむ。常陸帶

第二十　廉直　作者未詳

この書は何人の手になれるか明ならず。或は菅原爲長が作

なりといひ、或は橘、成季なりなどいへど定かならず。但、自序に建長四年の冬、神無月半の頃云々とあれば、著聞集とは同時の作なり。すべて人の訓、戒となるべき事どもを、十門に分ちて書きしるせり。

廉直といふは、いひつる事を、さなきよしにあらがひせず。知らざる事を、知り顔にもてなさず。契れる事を改めず。物を羨まず。喜をも歎をも深くせず。すべて直しきを宗として、曲れる心なきなり。日月は物一〻によりて、光をくらくせず。明王は一人のために法を曲げざるが如し。事により、人に隨ひて裏表なく、親しきをもひかず、疎きをも隔てずして、ひとしき思をなす。これを賢人といひ、又廉直と名づく。されば臣軌と申す文に、直臣の振舞を書きのべ、廉潔の章を分けて立てたり。大かた事かくれども、得まゝき人の物を得ず。戲にも、すまゝき程のふるまひをせぬなり。叔齊世を思ひ立ちしより、周の粟をうけずして、その齒白かりき。成王桐の葉を玉といひて、叔虞に賜はせけるをば、天子に戲言なしとゞ大史いさめ申しける。孔子、飲を盗泉の水に忍び、曾參、車を勝母の里にめぐらさずといへるは、惡しき文字をつけたるによりて、所の名をたに嫌ひけり。これ正しき道を深くする故なり。十訓抄

第二十一　樂のね海賊を感せしむ

和邇部用光といふ樂人ありけり。土佐の御舟遊に下りて、上りけるに、安藝國なにがしの泊にて、海賊押し寄せたりけり。弓矢の行方さらねば、防ぎ戰ふに力なくて、今は疑なく殺されなむと思ひて、篳篥を取り出でゝ、屋形の上に居て、あの黨や、今はさたに及ばずとぞ、何物をもとりたまへ。但、年ごろ思ひ染めたる、篳篥の小調子といふ曲吹きて、聞かせ申さむ。さる事とそありしかと、後の物語にもし給へといひければ、宗徒のもの、大なる聲にて、主達、さばし待ち給へ、かくいふ事なり、物聞けといひければ、舟をおさへて、おのゝ靜まりたるに、用光今は限と覺えければ、涙を流し、めでたき音を、吹き出で、吹きすましたりけり。折からにや。その調、浪の上に響きて、かの潯陽江のほとりに琵琶を聞きし、昔語にとならず。海賊さゝまりていふ事なし。よくゝ聞きて、曲終りて先の聲にて、君が舟に心をかけてよゼたりつれども、曲の聲に涙落ちてかたさりぬとて、漕ぎ去りぬ。猛きものゝふの心を慰むる事、和歌には限らず。これら皆、管絃の德なり。十訓抄

白樂天が琵琶行の故事をさせり。

第二十二　清少納言の事　作者未詳

一條院の御時、雪いとれもしろく降りたりけるに、香爐峯のありさまいかならむと、仰せられければ、清少納言、御前に候ひけるが、申す事はなくて、御簾をたしあげたりけるを、世の末まで、優なるためしに、いひ傳へられけり。かの香爐峯の事は、白樂天、老の後、この山の麓に、一〻の草堂を志めて、住みける時の詩に、

遺愛寺鐘歌枕聽、　香爐峯雪撥簾看。

とあるを、帝、仰せいたされけるによりて、御簾をばあげけるなり。かの清少納言は、天暦の御時、梨壺の五人の歌仙、清原元輔の女にて、その家の風、吹き傳へたりけるうへ、心ざまいうにて、折につけたるふるまひ、いみじき事多かりけり。十訓抄

第二十三　伊賀局　松翁

新安手簡によれば、この書の著者は吉房朝臣なりといふ。吉房、後醍醐帝に仕へて、勤怪二心あらず。登遐の後、思慕やまず、薙染して僧となり、松翁と號し、陵側に草庵を結びて住めりきゝみづからこの書の後に書して曰く、正平つちのとの戌の年の春、草の庵の雨に、吉野の花の露をしたてゝ、よしなし言をかきつらねゝ侍る云々。

新侍賢門院

後村上天皇の御母なり。

新侍賢門院に伊賀局といふありけり。これは左中將義貞朝臣の侍に、篠塚伊賀守といへるが女になむありける。一年、武藏守師直が皇后を襲ひ奉りし時に、防ぐべきたよりのなかりければ、人

人猶、山深く入らせ給ひけるに、女院の御供には、かゞしき侍もつき奉らで、女房たちばかりなりけり。吉野川の橋、一間がほど踏みぬとしてありけるに、この局、そのほとりの松櫻の、大きなる枝どもを引きをりく打ち渡して、女院を負ひ奉りて、人々をも渡しはて給ひけり。後にその時のおはきさなる枝を、そのべの六郎に折らせて、御覽ありけれども、叶はでやみにけり。いといかめしき事まゝありける。今は左馬頭正儀の妻になむなり給ひし。吉野拾遺

第二十四　神功皇后新羅を征し給ふ

中山忠親

軍の船、海まみちて、鼓の聲、山を動かす。新羅の王、これを見てれもすく、これより東に神國あり、日本といふなり。その國の兵なるべし。われたてあふべからずと思ひて、かの王すゝみて、皇后の御船の前にまゐりて、今より永く從ひ奉りて、年毎に貢物を奉るべしと申しき。皇后その國に入り給ひて、さまゞの寶の藏を封ず、國の指圖、文書をとり給ひき。王、さまゞの寶を、船八十に積みて奉る。高麗、百濟といふ二の國、この事をきゝて、われぢれられて、すゝみて從ひ奉りぬ。水鏡

讀書館藏版

第二十五　塞翁が馬

作者未詳

昔、もろこしに塞翁といふものありけり。かしこく強き馬をもちたり。これを人よりも貸し、われも使ひつゝ世を渡る便よしけるほどに、この馬いかゞしたりけむ、いづちともなく失せにけり。聞き渡る人、いかばかり歎くらむとて、とぶらひければ、悔いずとばかり言ひて、露もなげかざりけり。あやしと思ふ程に、この馬、同じさまなる馬を多くゐてきにけり。いとあり難き事なれば、親しき疎き、よろこびを言ひかくれども、まさ悅はずといひて、これをも驚くけしきなくて、この馬あまたを飼ひて、さまざまにつかふ間に、翁が子、今いたしくる馬に乘りて、落ちて、右の肘をつきて折りにけり。

聞く人、目を驚かして、問ふよりも猶驚いずといひて、氣色もかはらで、つれなく同じさまに答へて、過きけるに、その頃俄に國に軍起りて、兵を集められけるに、國中さもあるもの、殘なく出でゝ皆死にぬ。この翁の子、かたはなるによりて、漏れにければ、片手は折れたれども、命は全かりけり。十

訓抄

第二十六　日野阿新一

小島法師

文中　後龜山天皇の時の年號。

太平記は、花園天皇の文保二年より、後村上天皇の正平二十二年までおよそ五十年間の記事にて、その著者につきては、古來さまゝの說ども有りしが、近頃に至り、小島法師といふものゝ作なること、明になりぬ。されどそのいかなる人なるかは詳ならず、たゞ文中三年に、死にたるばかりは知られたり。

資朝の子息國光、中納言、その比ハ阿新殿とて、歲十三ゑておはしけるが、父の卿、召人ゑなり給ひしより、仁和寺邊に隱れて居られけるが、父誅せられ給ふべき由を聞きて、今は何事にか命を惜むべき、父と共ゑ斬られて冥途の旅の伴をもし、又、最後の御有樣をも見奉つるべしとて、母に御暇をゞ乞はれけるゞ。母御、頻に諫めて、佐渡とやらむは、人も通はぬ怖しき嶋とそきけゞ、日數を經る道なれば、いかんとしてか下るべきゞ、その上汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えずと、泣きかなしみて止めければ、よしや伴ひ行く人なくば、いかなる淵瀨ゑも身を投げて死なむと申しける間、母痛く止めば、又目の前ゑ憂き別もありぬべしと、思ひ詫びて力なく、今までは只一人つきそひたる中間を相添へられて、遙々と佐渡國へゞ下りけるゞ。

路遠けれども、乘るべき馬もなければ、はきも習はぬ草鞋ゑ、菅の小笠を傾けて、露分けわぶる越

路の旅、思ひやるとこそ哀なれ。都を出でゝ十日餘と申さに、越前の敦賀の津に著きにけり。これより商人船に乘りて、程なく佐渡國へぞ著きにける。人してかうといふべき便もなければ、自、本間が館に到りて、中門の前にぞ立つたりける。折節、僧のありけるが立ち出で、この内への御用にて御立ち候ふか、又いかなる用にて候ふぞと問ひければ、阿新殿、これは日野中納言の一子にて候ふが、この頃切られさせ給ふべしと承りて、その最後の樣をも見候ハむ爲に、都より遙々と尋ね下りて候ふといひもあへず、涙をはらゝ

と流しければ、この僧、心ありける人なりければ急ぎこの由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすが哀れにや思ひけむ、やがてこの僧をもて、持佛堂へ誘ひ入れて、踏皮、母纏とかせ、足洗ハせて、疎ならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿、これを嬉しと思ふにつけても、同じくは父の卿を疾く見奉むやと云ひけれども、今日明日斬らるべき人に、これを見せては、なかなかよみ路の障とも成りぬべし。又關東のきこえも、いかゞ有らむずらむとて、父子の對面を許さず、四五町隔りたる處に置きたれば、父の卿はこれを

聞きて、行末も知らぬ都よ、いかゞあらむと思ひやるよりも尙悲し。子は其の方を見遣りて、浪路遙よ隔つたりし、鄙の住居を想ひやりて、心苦しく思ひつる涙は、更よ數ならずと、袂の乾くひまもなし。

これこそ、中納言のおはします牢の中よりて見やれば、竹の一叢茂りたる處よ、堀ほり廻し、屏塗つて、行き通ふ人も稀なり。情なの本間が心や、父は禁籠せられ、子はまた稚しだとひ一所よ置きたりとも、何程のおそれか有るべきよ、對面をたよ許さで、また同じ世の中ながら、生を隔てたる

如くよて、なからむ後の苦の下、思寐よ見む夢ならでは、相見む事も有りがたしと、互よ悲しむ恩愛の、父子の道とそあはれなれ。

五月二十九日の暮程よ、資朝卿を牢より出たし奉りて、遙よ御湯も召され候はぬよ、御行水候へと申せば、はや斬らるべき時よなりけりと思ひ給ひて、嗚呼うたてしき事かな、我が最後の樣を見む爲に、遙々と尋ね下りたるをさなき者を、一目も見ずして、果てぬる事よとばかり宣ひて、その後は、かつて諸事につけて、言をも出たし給はず。（中略）夜よ入れば、輿さし寄せて乘せ奉り、爰より

五蘊　色、聲、香、味、觸をいふ。
四大　地、水、火、風をいふ。

十町ばかりある河原へ出たし奉り、輿舁きすゑ。たれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直つて、辭世の頌を書き給ふ。

五蘊假成形　四大今歸空　將首當白刃
截斷一陣風

年號月日の下に名字を書きつけて、筆を閣き給へば、劍手後より回るとゞ見えし。御首は敷皮の上に落ちて、屍は尙坐せるが如し。

此の程、常に法談なんどし給ひける僧來つて、葬禮形の如く取り營み、空しき骨を拾うて、阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手も撓み

倒れ伏し、今生の對面遂に叶はずして、替れる白骨を見る事よと、泣き悲しむも理なり。阿新いまだ幼稚なれども、けなげなる所存ありけれど、父の遺骨をば、只一人召し仕ひける中間より持たせて、まづ高野山に參りて、奥の院とかやに收めよとて、都へ歸し上せ、我ゞ身はいたはることと有る由よて、尙本間が館よゞ留りける。これは本間が情なく、父を今生よて我に見せざりつる欝憤を、散せむと思ふ故なり。太平記

下二段活用

第二十七　日野阿新二　小島法師

かくて四五日經ける程に、阿新書は病むよしに

て、終日に臥し、夜は忍びやかに抜け出で、本間が寢所なんど、細々よ伺うて、隙あらば、彼の入道父子が間に、一人さし殺して、腹切らむずる物をと、思ひ定めてゞねらひける。或夜、雨風烈しく吹きて、番する郎等共も、皆遠侍に臥したりければ、今夜こそ待つ所の幸よと思うて、本間が寢所の方を忍びて伺ふに、本間が運や強かりけむ。今夜ハ常の寢所をかへて、何處にありとも見えず。又二間なる處に、燈火の影の見えけるを、これは若、本間入道が子息よてやあらむ。それなりとも討つて恨を散せむと、ぬけ入りてこれを見るに、それたに爰にもなくて、中納言殿を斬り奉りし、本間三郎といふ者ゞ、只一人臥したりける。

よしやとれも時よ取りては、親の敵なり、山城入道よ劣るまゞと思ひて、走りかゝらむとするに、われは元來太刀も、刀も持たず、只人の太刀を、我が物と憑みたるも、燈火殊よ明なれば、立ち寄らば、やかて驚き合ふ事もやあらむずらむと、危みて左右なく寄りえず、いかゞせむと案ゞ煩うて立つたるに、折節夏なれば、燈火の影を見て、蛾といふ蟲の、あまた明障子に取り付きたるを、すはや究竟の事とそあれと思ひて、障子を少し引き

あくれば、此の蟲あまた内へ入りて、やがて燈を打ち消しぬ。

今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立ちより て探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく寢 入りたり。先、刀を取つて、腰にぜ。太刀を拔いて、

佐行變格

胸元に指し當て、寢たる者を殺すは、死人に同じ ければ、驚かさむと思うて、まづ足よて枕をはた

下一段活用

とろ蹴。たりける。けられて驚く所を、一の太刀に 脇の上を疊まで、つとつきとはし、返す太刀に喉 ぶゑ指し切つて、心閑に後の竹原の中へ引隱れ ける。本間三郎が一の太刀に胸を通されて、あつ

上一段活用

と云ふ聲に、番の衆共驚き騷いで、火を燃して、こ れを見るに、血のつきたるちひさき足跡あり。さ ては阿新殿の去わざなり。堀の水深ければ、木戸 より外へハよし出でじ、さがし出して打ち殺せ とて、手々に松明をともし、木の下、草の陰まで、殘 る所なくぐ搜しける。

阿新も竹原の中よ隱れながら、今は何處へか遁 るべき、人手にかゝらむよりは、自害をせばやと 思はれけるが、悪しと思ふ親の敵をば討ちつ、今 ハいかにもして、命を全うして、君の御用よも立 ち、父の素意をも達したらむとこそ、忠臣孝子の義

よてもあらむずれ。もしやとひとまづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛び越えむとしけるが、口二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべき樣もなかりけり。

さらばとれを橋よして渡らむよと思ひて、堀の上に末靡きたる呉竹の梢へ、さら〳〵と登りたれば、竹の末、堀の向へ靡き伏して、やす〳〵と堀をば越えてけり。夜はまた深し、湊の方へ行きて、舟に乘りてとそ陸へは著かめと思ひて、たどるたどる浦の方へ行くほどに、夜もはや次第に明け離れて、忍ぶべき道もなければ、身を隱さむとて日を暮し、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隱れ居たれば、追手共と覺しき者共、百四五十騎馳せ散つて、もし十二三ばかりなる兒や通りつると、道に行き合ふ人毎に、問音してゞ過ぎ行きける。

阿新其の日は麻の中よて日を暮し、夜になれば湊へと心ざして、そことも知らず、行く程に、孝行の志を感ドて、佛神擁護の眸をや回らされけむ、年老ぴたる山臥一人行き合ひたり。この兒の有樣を見て、痛ハしとや思ひけむ、これは何處よりいづくをさして、御渡り候ふぞと問ひければ、阿新、事の樣をありの儘にゞ語りける。山臥これを

きゝて、われ此の人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思し食され候へ、湊に商人船ども多く候へば、乗せ奉りて、越後、越中の方まで送り付けまゐらすべしと云ひて、足たゆめば、此の兒を肩に乗せ、脊よ負ひて、程なく湊よりゞ行き著けるゞ。太平記

次の年元弘二年なり。

第二十八　皇室中興の事　北畠親房

次の年の春、隱岐ゞ國に遷らしめまします。御子達も彼方此方に遷され給ひしに、兵部卿護良の親王ゞ、山々を廻り、國々を催して、義兵を興さむと企て給ひけるゞ。河内ゞ國に楠ゞ正成といふ者ありき。その志深かりければ、河内と大和との境に、金剛山と云ふ所に、城を構へて、近國を侵し平げしかば、東より諸國の軍を集めて攻めしかど、堅く守りければ、手易く落すこと能はず、世の中亂れ立ちにき。

次の年、立ち忍びて御船に奉りて、隱岐を出で伯耆に著かせ給ふ。その國に源ゞ長年といふ者あり。御方に參りて、船上といふ山寺に假の宮を建てゞ住ませ奉りけるゞ。彼の邊の軍兵ども、ばらくはきほひて襲ひ申しけれど、皆靡き申しぬ。都近き所々よりも、御志ある國々の兵、よりくうち出づ

上皇後伏見、花園。新主光嚴院をいふ。

八幡山山城にあり。

れば、合戰も度々になりぬ。京中騷しくなりて、上皇も新主も、六波羅より遷り給ふ。伯者よりも、軍をさ〻上せらる。こゝに畿内近國よりも御志あるともがら、八幡山に陣を取る。坂東より上れる兵の中、藤原親光と云ふ者も、彼の山に馳せ加はりぬ。つぎ〳〵御方よ參る輩、多くなりにけり。

源、高氏と聞えしは、昔の義家朝臣が二男義國といひしが後胤なり。彼の義國が孫なりし義氏は、平、義時朝臣が外孫なり。義時等が世となりて、源氏の號ある勇士には、心を置きければよや、押し据ゑたる樣なりしに、これは外孫なれば、取りたてゝ、領する所なども數多計らひ置き、代々になる迄隔なくてのみありき。高氏も都へさし上せられけるに、疑を免れむとにや、告文を書き置きてゞ進發しける。されど冥見をも顧みず、心變ゞて御方に參り、官軍力をぞし儘に、五月八日の頃よや、都にある東軍、皆敗れてあづまへ志して落ち行きしに、兩院新帝同ゞく行幸あり。近江、國馬場といふ所よて、御方よ志ある輩、打ち出でにければ、武士は戰ふまでもなく、多くは自滅しぬ。兩院新帝は都に歸し奉り、官軍これを守り申しき。かくて西ざま程なく鎭まりぬと聞えければ、還

告文起請の文なり。

幸せさせ給ふ。誠よめづらかなりし事よなむ。

東よも上野國に源義貞といふ者あり。高氏が一族なり。世の亂に思ひ起し、幾何ならぬ勢よて、鎌倉に打ち望みけるに、高時等運命窮まりて、國々の兵附き從ふ事、風の草を靡かすが如くにして、五月の二十二日よや、高時をはゞめとして、多くの一族、皆自滅してければ、鎌倉又平ぎぬ。符契を合する事もなかりしに、筑紫の國々、陸奥、出羽の奥までも、同ゞ月にゞ鎭まりにける。六七十里の間一時に興り合ひにし、時のいたり、運のきはまりぬるは、かゝる事よとそと不思議よもありし者かな。君はかくとも知らせ給はず、攝津國西宮といふ所よてゞ聞かせまし〳〵けるゞ。

六月四日、東寺よ入らせ給ふ。都よある人々、參り集りしかば、威儀を整へ、本の宮に還幸し給ふ。いつしか賞罰のさため有りしに、兩院新帝をば、ため申し給ひて、都に住ませまし〳〵けり。されど、新帝は僞主の儀よて、正位よは用ひられず、改元して正慶といひしをも、本の如く元弘と號せらる、官位昇進せし輩も、皆元弘元年八月より先のまゝよてゞ有りしゞ。神皇正統記

第二十九　天皇

から書の千巻八千巻くりかへし　齋藤彦麿

見れども見えず天つ日嗣は

萬代に現つ御神と大八洲　本居大平

國ぶろしめす君ぞかしこき

物皆はかはり行けども現つ神　本居宣長

わが大君の御代いとこしへ

第三十　御製

後柏原天皇

をさめしる我が世いかにと浪風の

八十島かけて行くこゝろかな

後醍醐天皇

世治まり民安かれと祈るとそ

わが身につきぬ思なりけれ

今上天皇

いにしへの文見るたびに思ふかな

おのがをさむる國いかにと

第三十一　楠正成の參内　小島法師

藤房卿、勅をうけたまはりて、急ぎ楠正成をぞ召されける。勅使、宣旨を帶して、楠が館へ行き向ひて、事の子細を演べられければ、正成、弓矢取る身の面目、何事かこれにすぎむと思ひければ、是非の思案にも及ばず、先、忍びて、笠置へぞ參りける。主上、

萬里、小路中納言藤房卿をもて、仰せられけるは、東夷征伐の事、正成をたのみたばしめさるゝ子細ありて、勅使を立てらるゝ處に、時刻を移さず、はせまゐる條、叡感淺からざる所なり。そもく天下草創の事、いかなる謀をめぐらしてか、勝つことを、一時に決して、太平を、四海に致すべき。所存を殘さず申すべしと勅定ありければ、正成畏りて申しけるは、東夷、近日の大逆、只天の責を招く上は、衰亂の弊に乘じて、天誅を致されむに、何の子細かあり申すべき。但、天下草創の功は、武略と智謀との二なり。もし勢を合せて戰はゞ、六十餘州の兵を集めて、武藏、相摸の兩國に對すとも、勝つことを得がたし。もし謀をもて爭はゞ、東夷の武力、たゞ利きを摧き、堅きを破るうちを出でず。これ欺くに安くして、怖るゝに足らざる所なり。合戰の習なれば、一旦の勝負は、必しも御覽せらる可らず。正成一人いまだ生きてありときこしめされなば、聖運遂に開くべしとぞ申しけり。太平記

第三十二　小山田高家の忠死

小島法師

義貞、求塚の上にたちて、乘替の馬を待ち給へども、あへて、御方、これを知らざりけるにや、れりて乘せむとする人なかりけり。敵やこれを見知りたりけむ、すなはち取りとめて、これをうたむと去けるが、ろの勢に辟易して、近くは更に寄らざりけれども、十方より、遠矢に射ける矢、雨霰の降るよりも、なほ繁し。義貞は、薄金といふよろひに、鬼切、鬼丸とて、多田、滿仲より傳りたる、源氏重代の太刀を、二ふり佩れたりけるを、左右の手に抜き持ちて、さがる矢をば飛び越え、あがる矢にはさしうつぶき、眞中をさして射る矢をば、二

振の太刀を相交へて、十六までぞ切りてれとされける。

小山田太郎高家、遙の山の上より、これを見て、諸鎧を合せて、馳せまゐり、れのれが馬に、義貞を乘せ奉り、わが身は徒立になりて、追ひ懸くる敵を防ぎけるが、敵あまたに取り籠められて、遂に討れにけりぞの間に、義貞、朝臣、御方の勢の中に馳せ入りて、虎口に害を遁れ給ふぞもく、官軍の中に、義を知り、命を輕くせる者、多しといへども、事の急なるに臨みて、大將の命にかはらむとする兵なかりけるに、遙にへたゝりたる小山田一

人、馬を引きかへして、義貞を乘せ奉り、剰、わが身あとにさがりて、討死しけるゝの志をたづぬれば、僅の情によりて、百年の身を捨てけるなり。

今年、義貞、西國の打手を承りて、播磨に下着し給ふ時、兵多くして粮乏し。もし軍に法を置かずば、諸卒の狼籍絶ゆべからずとて、一粒をも刈り採り、民屋の一ゝをも、追捕去たらむずるものをば、速にこれを誅せらるべきよしを、大札に書きて、道の辻々にゞたてられけるゝ。これによて、農民、耕作を棄てず。商人、賣買を心よく去けるところに、この高家、敵陣の近隣に行きて、青麥を打ち刈らせて、乘鞍に負せてゞ歸りけるゝ。時の侍所、長濱、六郎左門衛尉、これを見て、直に高家を召し寄せ、力無く、法の下なれば、これを誅せむとす、義貞、これを聞き給ひて、推量するに、この者、青麥に身をかへむと思はむや。この所、敵陣なればと思ひ誤りけるか、さらずば、兵粮に術盡きて、法の重きをわすれたるかの間なり。何樣、彼の役所を見よとて、使者を遣して、點檢せられければ、馬、物、具爽かにありて、食物の類は、一粒もなかりけり。

使者、かへりて、この由を申しければ、義貞、大にはぢたるけしきにて、高家が、法を犯す事は、戰のた

めに、罪を忘れたるなるべし。何樣、士卒、先んじて疲れたるは、大將の耻なり。勇士を失ふべからず。法をば亂る事なかれとて、田の主には、小袖二重與へて、高家には、兵粮十石相副へて、色代してぞ、かへされける。高家、このなさけに感じて、忠義いよゝ心にぞみければ、この時、大將の命にかはり、忽に討死をばきたるなり。昔より、今にいたるまで、流石に侍たるはどのものは、利をも思はず、威にも恐れず。たゞ、ぞの大將によりて、身をも捨て、命にもかはるものなり。今、武將たる人、これをつつきみて、これを思はざらめや。太平記

第三十三　藤房卿鷹巣山にて讀經の事

松翁

刑部卿義助朝臣の、越前國よりゐまして物語に、越前國鷹巣山は、高くそばだちて、城廓にしかるべき所なりければ、六郎左衛門時能といふものに守らせけるに、あないを知らむが爲に、猶奥ふかく分け入りにけるに、谷川のいと清く流れけるを、その水上をたづねに登りけるに、さし出でたる岩をかたどりて、松の葉にてふきたる庵の見えけるを、かゝる所にも住む人の有けるにやと、立よりて見侍れば、木の葉を集めてむしろと

し、平なる石の上に、法華經を置けるの外には、何も見えず。

去ばし有りけるに、山路をたどり來る人を見れば、痩せおとろへたる僧の、樒を手に持てり。いかにし給ふにやと、ものゝかくれより見けるに、谷川の水をむすびて、庵の内に入りて、經のひもを解きけるはどに、讀みはじめ給はねさきにと、急ぎゆきて、かゝる御住居とそいと尊くおぼえさふらへ、いかなる人の世をそむかせ給ひけるにやと問ひ奉るに、そこにはいかにと尋ねさせけるはどに、名のりをしつれば、いとはいなきさまして、東のものにとそとばかり宣ひて、經をよみ給ひしはどに、かへりてさふらふ藤房卿の御面影して侍るといひしまゝに、いとゆかしくて、一條少將を伴ひてまゐりけるに、庵はそのまゝありて、僧は見え給はず。經文ありつる石ときこえしに、

こゝもまた浮世の人のとひくれば
空ゆく雲にやどもとめてむ

と書きつけ給へる筆の跡を、少將のよく見知り給ひて、その邊の山々を尋ねさせ給ひけれども、更に見え給はねば、いとはいなくてと宣ひしを、

人々聞きもあへ給はで、皆涙落してけり。

さしもいみゞかりける人の、聞きしかごとの御住居は、誠に有難き御心にとそ。中略此の藤房は大納言宣房の子なりしを、才智世にすぐれ給ひて、君にも御おぼえの淺からで、中納言まで成り給ひしが、建武甲戌の春、俄に世を捨給ひき。吉野拾遺

甲戌　甲戌は建武元年なり。

第三十四　小野篁、廣才の事

源、隆國

隆國は權大納言俊賢の第二子にして、後一條、後朱雀、後冷泉、後三條、白河の五朝に歷仕し、承暦元年七十四歳にて薨じ給へり。

今は昔、小野篁といふ人、おはしけり。嵯峨帝の御ときに、内裏に、札を立てたりけるに、無悪善と書きたりけり。帝、篁に、讀めと仰せられたりければ、讀みさぶらひなむ。されど、たゞれにて候へば、え申し候はゞと奏しければ、唯申せと度々仰せられければ、さがなくてよからむと申して候ふゞ。されば、君をのろひまゐらせて候ふなりと申しければ、たのれ、はなちては、誰か書かむと仰せられければ、されば、ところ、申し候はゞとは、申して候ひつれと申すに、帝、さて何も書きたらむものは、讀みてむやと仰せられければ、何にても、讀み候ひなむと申しければ、かたかんなのねもゞを、十

二書かせ給ひて、讀めと仰せられければ、猫の子の子猫、獅子の子の子獅子と讀みたりければ、帝、はゝゑませ給ひて、事なくてやみにけり。宇治拾遺物語

第三十五　百濟川成と飛驒工と技を爭ふ

源、隆國

今は昔、百濟川成といふ繪師ありけり。世にならびなきものにて有りけり。瀧殿の石も、この川成がたてたるなりけり。同ど御堂の壁の繪も、この川成が書きたるなり。中略　さかるに、其の頃、飛驒工といふ工ありけり。都遷の時の工なり。世にならびなき者なり。豐樂院はゝりの工のたてたれば、めでたかるべし。さかる間、この工、彼の川成となむ、れのくゝりのわざを挑みにける。飛驒工、川成にいはく、わが家に、一間四面の堂をなむたてたる。ればして見給へ。また、壁に、繪などかきて得させ給へとなむ思ふ。かたみに挑みながら、中よくてなむ戲れければ、かくいふなりとて、川成、飛驒工が家に行きぬ。行きて見れば、實にをかしげなる、小さき堂あり。四面に戸みな開きたり。飛驒工、彼の堂に入りて其の内見給へといへば、川成、椽に上りて、南の戸より入らむとするに、其の戸、は

たと閉づ。驚きて、廻りて、西の戸より入る。また、其の戸はたと閉ぢぬ。また南の戸は開きぬ。されば、北の戸より入るに、その戸は閉ぢて、西の戸は開きぬ。また、東の戸より入るに、その戸は閉ぢて、北の戸は開きぬ。

かくの如く、廻り廻る數度。入らむとするに閉ぢ開きつ、入る事を得ず。侘びて、椽より下りぬ。その時に、飛驒工、わらふ事かぎりなし。川成、ねたしと思ひて、かへりぬ。その後日ごろ經て、川成、飛驒工が許にいひやるやう、わが家にわはしませ。見せ奉るべき物なむあると。飛驒工、定めてわれを謀らむずるなめりと思ひて、行かざるを、度々、ねむごろに呼べば、工、川成が家に行き、かく來れる由をいひ入れたるに、此方に入り給へといはしむ。いふに隨ひて、廊の有る遣戸を引きあけたれば、内に大なる人の、黒み脹れ、くさりたる臥せり。くさき事、鼻に入るやうなり。思ひかけざるに、かゝる物を見たれば、聲を放ちて、愕きてまかり返りぬ。

川成、内に居て、この聲を聞きて、わらふ事かぎりなし。飛驒工、わろしと思ひて、土にたてるに、川成、ろの遣戸より、顔をさしいでゝ、やゝ、われ、かく

有りけるは。只きたれといひければ、たづ〳〵、寄りて見れば、障子のあるに、はやうろの死人の形を書きたるなりけり。堂にはかられたるが、妬きによりて、かくきたるなりけり。二人のものゝわざ、かくなむありける。其の頃の物語には、よろづの所に、これを語りてなむ、皆人譽めけるとなむ、語り傳へたるとや。今昔物語

石原正明

第三十六　殿と様と

殿といふは、あへて其の身を指さず、居所をさしてよぶ禮節なり。物語ぶみどもに多く見えて、いと古し。様といふは方角をさす。西ざま、東ざま、と

ざま、かうざまのさまなり。五百年外の日記どもに、洞院様、西園寺邊などやうにかける常なり、との様といふは、邊といふに同じくて、方角をさす。ろはたゞ外々のうはさする所にこそいへれ、さしくその人に對して、様とも邊ともいひし事はなし。室町殿の比より、等持院殿様、鹿苑院殿様などいふ事きこえて、後には字躰によりて、尊卑をわかつやうの事いで來たり。この殿様と重なりたるさまは、もはら今やうのおもむきなれど、なほ方角をさす本の義、遺りていとよろし。茶壺といふ狂言に、判斷なしてたび給へ、所の檢斷殿

等持院足利尊氏をいふ。鹿苑院義滿が事なり。

様とうたふ、世上なべていひし事なるべし。今なべてはきとえねど、尾張美濃の民間に庄屋殿様、醫者殿様、舅殿様、禰宜殿様といふ事あり。此の四種の外、をさ〳〵聞えず、なほ心ある者は、詞重れりとて、耻ていはず、たゞ賤民の口にのこれり。これ三四百年來の古風なり。年々隨筆

第三十七　大塔宮熊野落一

小島法師

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞し召されむ爲に、しばらく南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞にしかば、虎の尾をふむおそれ、御身の上に迫りて、天地廣しといへども、御身を隱さるべき所なし、日月明なりといへども、長夜に迷へる心ちして、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻にイみて、人を咎むる里の犬に、御心を惱まさる。何處とても御心安かるべき所なかりければ、かくても去ばしはと思し召されける所に、一乘院の候人、按察法眼好專、いかゞして聞きたりけむ、五百餘騎を率して、未明に般若寺へ寄せたりける。折ふし宮に付き奉つたる人、一人もなかりければ、一

防ぎ防ぎて、落ちさせ給ふべき樣もなかりける上、遙間もなく、兵已に寺内に打ち入つたれば、紛れて御出で有るべき方もなし。さらばよし。自害をせむと思し召して、已よ推はた脱がせ給ひたりけるが、事叶はざらむ期に臨んで、腹を切らむ事はいと安かるべし、もしやと隱れてみばやと思し召し返して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる、大般若の唐櫃三〻あり。二〻の櫃はいまだ蓋を明けず、一〻の櫃は御經を半過ぎ取り出だして、蓋をもせざりけり。

此の蓋を開けたる櫃の中へ、御身を縮めて臥させ給ひ、其の上に御經を引き被ひて、隱形の呪を御心の中に唱へてゞおはしける。もし搜し出されなば、やがて突き立てむと思し召して、氷の如くなる刀を拔きて、御腹にさし當てゝ、兵爰にとそと、いはむずる一言を待たせ給ひける、御心の中、推し量るも猶淺かるべし。去程に兵、佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上までも、殘る所なく搜しけるがあまりに求め兼て、この物とそ怪しけれ、あの大船若の櫃を開けて見よとて、蓋した櫃二〻を開けて御經を取り出し、底を翻して見けれどもおはせず。蓋開きたる櫃は見るまでも

なしとて、兵みな寺中を出去りぬ。太平記

第三十八　大塔、宮熊野落二

小島法師

宮はふしぎの御命つがせ給ひ、夢に道行く心ちして、猶櫃の中にゐはしけるが、若又、兵立ち歸り、委しく搜す事もや有らんずらむと、御思案有つて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に、入かはらせ給ひてゐはしける。案の如く、兵共又佛殿に立ち歸り、前に蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なしとて、御經をみな打ち移して見けるが、から〳〵と打ち笑うて、大般若の櫃の中を、よく

よく搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄弉三藏とぞ坐しけれと戯れければ、兵皆一同に笑つて、門外へゐ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なりと、信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

かくては南都邊の御隱家も叶ひ難ければ、則、般若寺を御出ありて、熊野の方へゐ落ちさせ給ひける御供の衆には、光林房玄尊、赤松律師則祐、本寺のさがみ、岡本の三河房、むさし房、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀の三郎、かれとれ以上九人なり。

宮を始め奉りて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を懸け、頭巾眉半に責め、其の中に年長せるを、先達に作り立て、田舍山伏の、熊野參詣する躰にぞ見せたりける。此の君本より、龍樓鳳闕の中に、長とならせ給ひて、華軒香車の外を、出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は、定めて叶はせ給はゞと、御供の人々、兼ては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなるたびはゞき、草鞋を召して少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行き合ひける道者も、勤修を積める先達え、見咎むる事なかりけり。

○からの湊を見渡せば、冲漕ぐ舟の揖をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも、さらぬ浪路に鳴く千鳥、紀路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の波、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心をくたく習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目王子に着き給ふ。太平記

第三十九　保元の軍評定に爲朝が申條

作者未詳

保元物語は、後白河院保元元年七月の兵亂の顚末をしるせるものにて、その作者は、葉室時長なるよしいへど、たしかならず。

爲朝は、七尺ばかりなる男の、兜をば郎等にもたせて歩みいでたる體、樊噲もかくやとぞおぼえて、ゆゝしかりき。謀は、張良にも劣らず。されば、堅陣を破る事、吳子、孫子が、難しとするところを得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふ事なし。上皇をはじめまゐらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見むとて、とぢり給ふ。左府、即合戰の趣、計らひ申せと宣ひければ、畏りて、爲朝、久しく鎭西に居住仕りて、九國の者

左府　左府は即、左大臣藤原頼長なり。

共、從へ候ふにつきて、大小の合戰數を知らず。中にも、折角の合戰、二十餘箇度なり。或は、敵に圍まれて、强陣を破り、或は、城を攻めて、敵を亡すにも、皆利を得ること、夜討にさくこと侍らず。されば、只今、高松殿に押寄せて、三方に火を懸け、一方にて支へ候はむに、火を遁れむ者は、矢を免るべからず。矢を恐れむ者は火を遁るべからず。主上の御方、心にくゝも候はず。但、兄にて候ふ義朝などころ、懸けいたすらめ。されも、眞中さして射通し候ひなむ。

まして清盛などが、へろ〳〵矢、何程の事か候ふ

べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散して捨てなむ。行幸他所へならば、御免を蒙りて、御供の者、少々射むずる程ならば、定めて駕輿丁も、御輿をすてゝ、逃げ去り候はむずらむ。其の時、爲朝、參り向ひて、行幸を、此の御所に成し奉り、君を御位に即けまゐらせむ事、掌を返す如くに候ふべし、主上を迎へまゐらせむ事、爲朝、矢二ッ三ッ放さむずるばかりにて、いまた天の明けざらむ前に、勝負を決せむ條、何の疑か候ふべきと、憚る所もなく申したり。保元物語

第四十　待賢門の戰　作者しらず

切符　切符は鵰の羽の上下に黑班ありて、中は白きをいふ。

黃鶺毛　黃鶺毛は黃白色。

この書は、平治の亂より、源頼朝兵を起すまでの事をしるせり。こも亦葉室時長が作なりなぞいふめれど、詳ならず。

左衛門佐重盛は、生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫨匂の鎧、蝶の裾金物打ちたるに、龍頭の兜の緒をしめて、小烏といふ太刀を帶き、切符の矢負ひ、重藤の弓持ちて、黃鶺毛なる馬に、柳櫻摺りたる貝鞍、おかせて、乘り給へり。重盛、宣ひけるは、年號は、平治なり、花洛は、平安城なり。我等は、平氏なれば、三事相應せり。敵を平げむ事、何の疑かあるべき。誰か、爰に奚噲、張良が勇をなさゞらむとて、三千餘騎を、三手に分ちて、

近衛、中御門、大炊御門、大宮面に打ち出で、陽明、待賢、郁芳門へ押し寄せたり。

鯢波に驚きて、只今までゆゝしく見えられつる信頼卿、顔色變りて、草葉の如く、南階を下られけるも、膝戰いて、下り兼ねたり。人なみ〳〵に馬に、乘らむと、引き寄せさせたれども、ふとりせめたる、大の男の、大鎧は着たり、馬は大なり、乘り煩ふ程、主の心には似も似ず、はやり切りたる逸物なれば、つといでむとしけるを、舍人七人寄りて、馬を抱へたり。放たば、天へも飛びぬべし。乘りかね給ふ所を、侍二人、つと寄りて、疾く召し候へとて、

押し上げたり。餘にや押したりけむ、弓手の方へ乘り越して、伏し樣にぞうと落つ。

急ぎ、引き越して見れば、顔に、砂ひしと附き、鼻血流れて、見苦しかりけり。義朝、此の體を見て、日來は、大將とて恐れ給ひけるが、はたと呪みて、あの信頼といふ不覺人は、臆したりなとて、日華門を打ち出でゝ、郁芳門へ向はれければ、信頼も、鼻血わし拭ひ、兎角して、馬にかき乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に逢ふべしとも、見えざりけり。

左衛門佐重盛、五百餘騎をば、大宮面に殘し置き、

五百餘騎にて、押し寄せて、呼ばはり給ひけるは、此の門の大將軍は、信頼卿と見るは僻目か。かく申すは、桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛、生年二十三と名乘り懸けゝれば、信頼、返事にも及ばず、ひれ防げ、侍共とて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなく、われ先にと逃げゝれば、重盛、いよ〳〵勇みて、大庭の椋の木の下まで、攻め附けたり。義朝、これを見て、悪源太はなきか。信頼といふ大臆病人が、待賢門を、はや破られつるぞや。あの敵、追ひ出せと宣ひければ、承り候ふとて、懸られたり。

十七騎、轡を雙べて、馳せ向ふ。大音聲を揚げて、此の手の大將は、誰人ぞ名乘れ、聞かむ。かく申すは、清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝の嫡子、鎌倉の悪源太義平と申すものなり。生年十九歳、見參せむとて、五百騎の眞中へ破つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひ廻し、縱横横、十文字に、敵を颯と蹴散して、半武者どもに、目なかけろ。大將軍を組むでうて。櫨匂の鎧に、蝶の裾金物打ちて、黄鴾毛の馬に乘りたるとろ重盛よ。押し雙べて、組みて落ち、手捕にせよと下知すれば、十七騎の兵ども、大將軍に、目をかけて、大庭の椋の

木を、中に立てゝ、左近の櫻、右近の橘を、七八度まで、追ひ廻して、組まむ〳〵とゞ揉みたりける。十七騎にかけたてられて、五百餘騎、かなはゞとや思ひけむ、大宮面へ颯と引く。中略 惡源太、二度まで、敵を追ひまくり、弓杖ついて、馬に息をつかせけるに、義朝、これを見て、須藤瀧口をもて、汝が不覺に防げばとこそ、敵度々駈入るらめ。あれ速に追ひ出せといひつかはされければ、俊綱、馳せて、此の由をいふに、承り候ふ、進めや者共とて、色も替らぬ十七騎、大宮面にかけいでゝ、敵五百餘騎が中へ、面も振らず破つて入る。平治物語

先生は帶刀の長なり、帶刀とは春宮坊侍衛の士なり。

第四十一　忠致、尾州に逃れ下る事

作者未詳

さる程に、永曆元年、正月二十三日、除目行はれて、長田四郎忠致は、壹岐守になり、先生景宗は、兵衛尉になされけるを、父子共にきらひ申す。義朝、政家は、昔の將門、純友にも劣らぬ勇士なり。就中、東國に下着し給ひなば、いにしへの貞任、宗任、十二年支へたりしよりは、猶つき從ふ兵、多かるべし。さらば、ゆゝしき御大事なるべきを、事故なく、誅しとゞめむは、抜群の戰功なり。其の上、かの人々を討ちて進らせむ者をば、不次の賞、行はるべし

ところ仰せ下されしかぜめては、彼れか所帶なれば、播磨國をも賜り、左馬頭にもなされむところ面目ならめ。さらずば、本國なれば、美濃、尾張を賜りてところ、勸賞とも存せめと申せば、筑後、守家貞、あはれ、きやつを、二十の指を、二十日に截り、首をば、鋸にて引き切りに去候はゞや。相傳の主と、まさしき婿とを殺して、過分の望を申す、あまりにくゝ覺え候ふ、後代のために、承り沙汰し候はむと申しければ、既に誅せらるべしなど、風聞ありければ、面目を失ふのみならず、身體危かりしかば、いそぎ尾張に逃げ下りけり。そのあした、宿に狂歌をよみて捨てけり。

落ちゆけば命ばかりはいきの守、
そのをはりとそ聞かまほしけれ。

平治物語

第四十二　武將の吟詠

埋木の花さく事もなかりしに　　頼政
みのなる果ぞあはれなりける

武藏野と何處をさして分け入らむ　　氏康
露ゐかぬ方もありけり夕立の　　持資
ゆくも歸るもはてしなければ
空よりひろき武藏野のはら

限あれば吹かねを花ハちる物を　氏郷

こゝろみゞかき春のやまかせ

第四十三　經家悍馬を御す

橘、成季

武藏國の住人、都築平太經家は、高名の馬乘馬飼なりけり。平家の郎等なりければ、鎌倉右大將めし取りて、景時に預けられにけり。其の時陸奥より、大ゝして猛き惡馬を奉りたりけるを、いかにも乘るものなかりけり。きこえある馬乘どもに、面々に乘せられけれども、一人もたまるものなかりけり。幕下、思ひわづらはれて、さるにても、と

助動詞

の馬に乘る者なくてやまむとと、口惜しきことなり。いかゞすべきと、景時にいひあはせ給ひければ、東八箇國に、今は心にくき者候はず。但、召人經家ゞ候ふと申しければ、さらば召せとて、すなはちめしいたされぬ。

白き水干に葛の袴をゞ著たりける。幕下、かゝる惡馬あり、仕りてむやとの給ハせければ、經家、かしこまりて、馬ハろならず人よ乘らるべき器にて候へば、いかに猛きも、人に隨ハぬことや候ふべきと申しければ、幕下入興せられけり。さらば仕うまつれとて、乃、馬を引きいたされぬ。誠に大

にたかくして、あたりを拂ひて、はね廻りけり。經家、水干の袖くゝりて、袴のそば高くもさみて、ゑぼうしがけして、庭にあり立ちたるけしき、まづゆゝしくぞ見えける。かねて存知たりけるよゝ、轡をぞもたせたりける。その轡をはげて、さし繩とらせたりけるを、すこしも事ともせず、跳ねはしりけるを、さし繩にすがりて、だぐりよりて、乘りてけり。

やがてまかりあがりて出でけるを、少しはしらせて、うち止めて、のどくゝと歩ませて、幕下の前にむけてたてたりけり。見る者、目を驚かさずといふことなし。よくのらせ、今はさやうにてこそあらめと、の給はせける時ぬりぬ。大に感ぜ給ひて、勘當ゆるされて、廐別當になされにけり。彼の經家が馬飼ひけるは、夜半ばかりに起きて、何にかあらむ、白き物を一かはらけむかり、手づから持ち來りて、必飼ひけり。すべて夜々ばかり物をくはせて、夜明くれむではたけ、髪をゆむせて、馬の前よゝ、草一把もわかず、さはくと掃かせてぞありける。

幕下、富士川あるざむの狩に、いでられける時も、經家は、馬七八匹に鞍置きて、手繩むをびて人も

已然言

打消の助動詞

つけず、うち放して侍りければ、經家が馬の尻に隨ひて行きけり。さて狩場まて、馬のつかれたる折にハ、召に隨ひてゞ參らせける。かやうに傳へたるものなし。經家いふかひなく入海して死にければ、知るものなし。口をしき事なり。古今著聞集

第四十四　義家の智能　橘、成季

義家朝臣、十二年の合戰の後、宇治殿へまゐりて、職の間の物語しけるを、匡房卿よく〳〵きゝて、器量はかしこき武者なれども、なほ軍の道をば知らずと、獨言にいはれけるを、義家の郎等きゝて、けやけきことをの給ふ人かなと思ひたりけ

永保　後三條天皇の御代の年號。

り。

さる程に、江帥いでられけるに、やがて義家もいでけるに、郎等、かゝる事をとそのたまひつれと語りければ、定めてやうあらむといひて、車に乘られける所へ進みよりて、會釋せられけり。やがて弟子になりて、それより常にまうでゝ、學問せられけり。

その後、永保の合戰の時、金澤の城を攻めけるに、ひとつらの雁とび去りて、苅田の面におりむとしけるが、俄に驚きて、つらをみたりて、飛び歸りけるを、將軍怪しみて、くつばみをおさへて、先年

江、師のをしへ給へる事あり。軍、野に伏するときも、飛鳥行をやぶるとぞ、この野に必敵、伏したるべし、搦手をまはすべき由、下知せらるれば、手を分ちて、三方をまく時、案の如く三百餘騎をかくしおきたりけり。兩陣亂れ合ひて、戰ふこと限なし。されどもかねてさとりぬる事なれば、將軍の軍かちに乘りて、武衡ぐ軍やぶれにけり。江、師の一言なからましかば、あぶなからましとぞ言はれける。古今著聞集

第四十五　猿、鳥を使ふ　橘、成季

文覺上人、高雄興隆の頃、見まもりけるに、清瀧川の上に、大なる猿兩三匹ありけるが、一の猿、岩の上にあふのき臥して動かず、二匹は立ちのきて居たりけり。上人あやしみ思ひて、かくれて見ければ、鳥一兩飛び來て、このねたる猿のかたもらにゐたり。ゑばしばかりありて、猿の足をつゝきけり。猿なほ働かず、死にたるさまにてあれば、鳥次第によつゝきて、上によのぼりて、眼をくゞらむとしける時、猿、鳥の足をとりて起きあがりにけり。その時、殘の猿二疋いで來て、長きかづらを持ちて、鳥の足によつけてけり。

鳥とびさらむとすれども叶はず。さてやがて川

にゐりて、鳥をば水に投げ入れて、かづらのさきをとりて一疋はあり、いま一疋は、川上より魚をかりけり。人の鵜つかひけるを見て、魚をとらむとしけるよや、不思議なる思ひよりたりける。鳥い水になげ入れられたれども、その益なくて死にゝけれど、猿どもは打ちすてゝ山へ入りにけり。不思議なりし事、まのあたり見たりきとて、すなはち上人の語りける事なり。古今著聞集

第四十六　狗、蛇を殺す　源、隆國

今は昔、陸奥、國に住みける賤しき者あり。家に數の犬をかひて、常に具して深山に入りて、猪、鹿を

下二段活用

とらする事を、晝夜明暮の業とす。狗も主が山へいれば、喜びて後先にたちてゆき、猪、鹿を咋み殺すを役とす。かくする事を、世の人、狗山いふなるべし。かゝる時は、食物をもちて、二日三日も山に留ること多し。

或時この男、例の如く犬どもを具して、山に入りて、その夜ゐ大なる木のうつぼに入りて、傍に弓、箙、太刀をおき、前に火をたき、狗どもはめぐりに皆臥したりけり。然るに、夜ふけて狗どもよく寐入りたるに、年來すぐれてかしこき狗ありしが、俄に起き來りて、主に向ひて、夥しく吠えければ、

主、何をはゆるにやと、怪しく思ひて、見めぐらすに吠ゆべき物なし。狗は猶吼えやまずして、主に向ひて、躍りかゝりく、て、頻に吼ゆ。主、驚きてはゆべき物もなきにかくあるは、獣は主を知らぬものなれば、人もなき山中にて、われをくらはむと思ふならむ、切り殺して棄てむやとて、太刀を拔きて、威しけれども、少しも退かず、いやましに吼えければ、かゝる狹き穴にて、喰ひつかれなば、あしからむと思ひて、うつぼより外へ、躍り出でけり。

その時にこの狗、うつぼの上の方に、躍りあがりて、物によくひつきぬ。主、さてはわれをくらはむとて、吼えけるにはあらざりけりと見るうちに、何とハ知らず、夥しきもの、狗と共に落ちたり。狗猶も放たず、くひつき居たり。主、見るに、長さ二丈餘なる蛇なり。主、刀をぬきて蛇を切り殺して、狗をひき離しけり。

これはこの木の上に、大蛇の棲みけるを知らで、その洞によりふしけるを、蛇の呑まむとて、おりしを見て、狗ははえけるなり。狗なくして、この蛇にまかれなば、たすからむやとが爲にハならびなき忠ある狗なりとて、具して家に歸りきとな

む語り傳へたるとなり。今昔物語

第四十七　高倉院の御仁德

作者未詳

平家物語は、平家一代の事を書きしるせる書にて、その作者は詳ならず。或は信濃の前司行長が作なりといひ、或は菅原の爲長の作なりといひ、或は葉室大納言時長なりなど、さまざまにいへれど、畢竟するに、數多の人の合作になりしものならむ。琵琶に合せて、歌はむ爲につくりたれば、文章流麗にして、優雅なり。

高倉院、御在位の御時、人の從ひつき奉る事は、恐くらは延喜、天曆の帝と申すとも、これまはいかで勝らせ給ふべきとぞ人申しける。おほかた賢王の名を擧げ、仁德の功を施させおはします事も、君御成人の後、清濁を分かたせ給ひての上の

御事でこそあるに、むげに此の君はいまだ幼主の御時より、性を柔和に稟けさせおはします。いぬる承安の頃は、ひは、御年十歳ばかりよもや成らせおはしましけむ。あまりに紅葉を愛せさせ給ひて、北陣に小山を築かせ、櫨、楓の誠に色をうつくしうもみぢたるを植ゑさせ、紅葉の山と名づけて、ひねもすに叡覽あるに、猶飽きだらせ給はず。然るを、或夜野分はしたなう吹きて、紅葉皆吹き散らし、落葉すこぶる狼藉なり。殿守の伴のみやつこ朝清すとて、これをことごとくはき捨てゝけり。殘れる枝、散れる木の葉を

縫殿陣　縫殿陣は北陣なり。

ば掻き集めて、風すさまじかりける朝なれば、縫殿陣よりて、酒あたゝめてたべける薪よりこそ出てけれ。奉行の藏人、行幸より先にと急ぎ行きて見るに、跡方なし。如何にと問へば、出かゞと答ふ。あなあさましさも君の執し思し召されつる紅葉を、かやうに出つる事よ。知らず、汝等禁獄、流罪よりも及び、我が身もいかなる逆鱗よりか預らむずらむと思はゞ事なう、案ゞ續けて居たりける所に、主上いとゞしく、夜のおとゞを、出させもあへず、かしこへ行幸なりて、紅葉を叡覽あるに、なかりければ、いかよと御尋ありけり。藏人、何と奏

林間に酒云々　白樂天の詩句なり。

すべき旨もなし。ありのまゝに奏聞す。天機殊よ御心よげに打ち笑ませ給ひて、林間に酒をあたゝめて紅葉をやくといふ詩の心をば、されば、それらよは誰が教へけるぞや、やさしうも仕りたるものかなとて、かへりて叡感よ預りし上ハ勅勘なかりけり。平家物語

第四十八　高倉院の御仁德二

作者未詳

又、安元のころはひ、御方違の行幸のありしに、さらでだに、警人、曉を唱ふ聲、明王の眠を驚かす程よもなりしかば、いつも御寢覺がちにて、つやつ

上日の者、宿直當番の者をいふ。

や御寢もならざりゝ。況、さゆる霜夜の烈しきにも、延喜の聖代、國土の民どもが、いかに寒からむとて、夜の御殿にして、御衣を脱がせ給ひける事なども、思し召しいでゝ、我が帝德の至らぬ事をゞ御歎きありける。

やゝ深更に及びて、程遠く人の叫ぶ聲ぞきけり。供奉の人々は聞きもつけられず、主上はきこしめして、唯今叫ぶゝ何者ぞ、あれ見て、參れと仰せければ、上臥したる殿上人、上日の者に仰せて尋ぬれば、ある辻にあやしの女の童、長持の蓋さげたるが、泣くよてゞありける。いかにと問へば、主の

女房の院の御所に侍らはせ給ふが、この程やうやうにして、仕立てられつる衣を持ちて、參る程に、唯今男の二三人まうで來て、奪ひとりて、まかりぬるゞや。今は御裝束があればこそ御所よも侍はせ給はめ。又はかゞしう立ち宿らせ給ふべき、親しき御方もましまさず。これを思ひ續くるに、泣くなりとゞいひける。

さて彼の女の童を具して參り、この由奏問したりければ、主上きこし召して、あなむざん。何者のたわざよてかあるらむとて、龍顏より御涙を流させ給ふゞかたゞけなき。堯の代の民は、堯の心

のすなはなるを以て、心とする故に、皆すなはなり、今の世の民は、朕が心を以て、心とする故に、かたましき者、朝よりありて罪を犯す、これ朕が耻にあらずやとぞ仰せける。さるよても取られつらむ衣は、何色ぞと仰せければ、赤かぐの色と奏す。建禮門院その時もいまた中宮よて渡らせ給ふ時なり。その方へさやうの色したる御衣や候ふと御尋ありければ、先のより遙に色美しきが参りたるを、件の女の童にぞたまはせける。いまだ夜深し、又さる目よもぞ逢ふとて、上日の者をあまたつけて、主の女房の局まで送らせまし

安永　後桃園天皇將軍家治。

明暦の帝　後西院天皇をいふ。

しましけるぞかたじけなきされば、あやしの賤の男、賤の女にいたるまで、只との君千秋萬歳の寶算をぞ祈り奉る。平家物語

第四十九　勸修寺經廣卿　富士谷層城

層城名は成章、通稱は專右衛門、皆川淇園が弟なり。語學につきて發明の説ども多し。おもひ抄、かざし抄の如き最世に知らる。安永八年、享年四十二にてみまかりぬ。

明暦のみかど、茶の湯の數寄せさせ給ひけるに、井戸といふ茶碗をえさせ給ひて、二なくひめさせ給ふ。ある時、上の人々に、御茶をたまはせけるに、勸修寺入道大納言まゐられける時、御茶給ひ

けるに、入道、井戸の茶碗と申すものこそ名よは承りて、いまた見ず候へ、給はりてよく〳〵見侍らばやと奏せられければ給はりけり。

入道、茶碗をもちて、勾欄よ臨みつゝ、見給ふほどに、とりおとして、御前栽のはしある岩の角にあたりて、碎けよけり。帝、いみじう惜ませ給ふ御氣色なれば、打ち畏まりて、まことは過ちて取りおとし候ひつれど、よくとこそ仕うまつりて候へ。井戸の茶碗は古きものにて、そのかみいくらの人の手に觸れけむも知らねば、穢らはしきえせ物よてゝ侍る。おはやけの御調度となさせ給ふべきものよも候いねど、碎けうせぬるこそ誠にめでたく候へとて、まかり出でられけり。帝もさることゝゝや思し召しけむ、御氣色なほらせ給ひけり。

又、同じ御時、よろづの風流を好ませ給ふあまりに、御脇差といふものを造らせ給ひて、興ぜさせ給ひけり。それもとの入道殿よ見せさせ、給ひければ、これは御はかしの姿よも候はねど、恩賜の料にや候ふらむとて、やがて賜はりていでられけり。おほうみのはし

第五十　からふみよみの言葉

本居宣長

漢籍をよむに、よの常に異なる語の多きは、いと古くより訓みきつるまゝの古語なるが、後に音便よくづれたるなり。日を「のたうまく」とよむも、「のたまはく」の音便なり。又「のたばく」にてもあるべし。古言に「たまふ」を「たぶ」ともいふ、故に萬葉の歌に「のたまはく」を「のたばく」ともよめるなり。故を「かるがゆゑに」とよむは「かゝるがゆゑに」なるを「か」を一省けるなり。これは音便にいふまはあらず。然而を「しかうして」とよむも「しかして」に「う」を添へたるまて、八日を「やうか」、女房を「にようばう」といふ類なり。是以を「これをもて」とよまずして「とゝをもて」とよむは、古言のまゝなり。古言まは「これ」といふべきを「とゝ」といへること、常に多し。

さて以を「もつて」と、ひきつめてよむも、例のいやしき音便なり。慮を「おもんばかる」、以を「おもんみる」とよむは「おもひはかる」「おもひみる」なり。垂を「なん〳〵とす」とよむは「なりなんとす」なり。然るを「なん〳〵たり」ともよむは、ひがことなり。欲を「ほつす」とよむは「ほりす」なり。件を「くだん」とよむは「くたり」なり。親を「したしんず」、重を「おもんず」、賤

を「いやしんず」とよむたぐひは「したしみす」「おもみす」「いやしみす」よて、皆古言の格なり。

又、好を「よみんず」、惡を「にくみんず」とよむなどは、「よみす」「にくみす」よて、これも同じ古言の格なるに、「ん」をそへたるなり。「ときは」を「ときんば」、「ずば」を「ずんば」といふ類も同じ。涙を「なんた」、「成りぬ」を「なんぬ」、「畢りぬ」を「をはんぬ」、「遂げにし」を「とげんに」、「成りにし」を「なりんに」とよむたぐひ、音便に「ん」といふこと、猶くさぐ〳〵多し。玉かつま

新編國文讀本二の卷下 終

明治廿八年四月十八日印刷　明治二十八年五月一日發行
明治廿九年三月卅日再版印刷　明治廿九年四月五日發行
明治廿九年六月廿日訂正三版印刷　明治二十九年七月七日發行
明治三十一年九月五日版權讓受

新編國文讀本二の卷下
正價金十五錢

編述者　福岡縣福岡市濱ノ町二十五番地　藤井乙男
發行者　大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷　石田忠兵衛
印刷者　大阪市南區大寶寺町中之町三百三十八番邸　堀越幸

版權所有

特約販賣各店

大阪市東區安土町四丁目　積善館本店　電話東二一三〇
福岡市博多中島町　積善館第一支店
廣島市拙屋町　積善館第二支店
東京市日本橋區通油町　水野慶次郎

A. Sakai